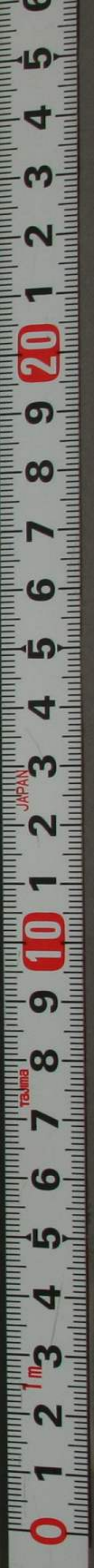


大内  
興立  
十杉傳  
第二輯

卷三

共  
202  
3

15  
202  
3





東照

十杉傳卷之八

第十五回

山寨主領關進卿

202  
3

話説阿千賀が母の刀自ハ旅装と調ひて。又護足と云へ。と。此小寺と小  
 田原より。上條家より足柄宮根。その外山路。関と居出入の人と。監察して。漫通  
 路協ハ。風よ。風よ。風よ。且女と。此街道平。中。風。中山道と木  
 本の人。賊。賊。賊。道。道。道。中山道と木  
 曾路へ。花。花。花。道。道。道。中山道と木  
 せん。思。思。思。道。道。道。中山道と木  
 月。上。上。上。道。道。道。中山道と木  
 さ。彼。彼。彼。道。道。道。中山道と木

道々馬士轎の破落戸等々多くに駭して若も此方の會狀悪く其  
虚に選て酒買せ賭博の本銭と沁人のめと欲するまに油断せども千賀  
松と先よまゝ。白根のて捲へる刀一腰佩さる。そのさる猛さ壯夫の容貌ハ  
多まののうらま。徳角ある少年る。ゆで旅中の守るところハ小雪と處女  
と中ふとて自らことと後駭して前後心と配る。往のうらに交執の蒸  
ぐとさすも厭ひる。朝早くてハ物慮るりと辰の刺と然己の刺も。近ほく頃  
ふと出の。夕ハ晡と限として旅泊もさす。朝夕の涼さありハ家にあり却と  
旅人が樹の下ハ暑さと避る日中の汗ハ衣ハ滴とと堪え忍びて路とぬ  
かりふと目ハ暑ハ破目暑ハ護熱預痛して。いと不憶悩むむと千賀松小  
雪さ多く痛り。暑邪ハ散らる暑ると暑と暑と息らむと旅店の主もせと

見て此程ハ照鏡まで清水と湯果ぬ。かる病ハ此よりけて路ぬえ  
ゆゆゆ悩まん。まぐ二三日此処ハ在て療治を加へるとのふと老女ハ心  
ハ弥武に早と此の病着ハ塗方多く。此松枝ハ滞留して病ハの愈ると  
待ふ多り。かくて處女の伴作ハ老女ハ病ハハ抑留せらして此旅店ハ業  
もる。二三日送るりのうら賢き人ハ只管ハ寸陰とさ惜むとのある。這  
般の小事にむとらハ可惜月日と徒ハ送らんよりハ吾一個ハやまんと  
名ハ。然らる時ハ小雪等と。いと本意多くもあへ。浮世と旅とあへ  
此ハ。さのさ厭ふべきもあらむ。近き歩の氣も視て。その地刺と  
探んと其の処等此処等と歩行は。ま。ハ里老ハ地名と尋ね自らと  
案抄。漫ハ捲び歩行ハ。或夜風いと涼くと。沐浴も男の例の下と

見所もるた山里のまじど。たゞ狗々どて病は在り。増るらんうとら  
如く。彼方此方へ踞踏ども。如法暗夜の冥るをバ遠き歩ハ眼も及ぶ  
星の光る路の邊の。千種ふあける露の王大和瞿麥朝自の朝す  
よひる風情まで。夫と定るよむおねども。巖漏る清水清々と音も幽  
音き渡り。まご密なる松の声裾らちならハ夜嵐ふ異と忘るる憂  
と遣て。坐し嘯き居りる。あふ上野も国碓氷の郡ふ岳々高  
あり。世よめて是と妙美と称ふ。あの山本相森然とて中天小尊え  
頂上よ至とバ雷ハ地下ふ鳴動し。雨雲足下の溪より起る霧は至りて  
御ぎ。想はば萬奴の青壁刀に削る。千丈の碧潭藍ふ流り。澤は落  
ゆる山水ハ巖ふ碎て音凄しく。梢と傳ふ夜半の風ハ軍馬の幾と

疑ふ。あつる赤壁と欲むら石と積てハ口と做し。梢と覆ひく家根と  
る。竹と祖で床とる甘る。寨と構へて山賊の張本らハ妙美の二部  
夥多の賊等と徒へく。此処に住と年久しく。在る所々へ乱入て資財  
と奪ひ糧と掠め。まごハ美面ふた女と捕へ側女ともる。或ひは賣  
暴悪日々増長して。近邊恐怖の必ひとるせども。いと堅固なる山寨  
にて。殊も多くの小賊等。日々月々ハ附属して。三百餘人槍籠王の  
国司より討ておらバ。慶登ゆて山寨の威と近国ふ尔さんと大石大  
木と積累おねら。弩の備へ嚴重るをバ。国司も判さるる良協り。ど  
乱妨と防ぐのそ。そむくはる張本の。人性と索める。信濃国なる  
浦上家まで。殺代相思の老臣ら。植村左膳が執るり。去ゆる。永京ハ

年小浦上居左原と合戦あり。左膳ハ一軍の大將にて、教子の軍馬を引率  
 し。浅間の麓に陣とこると。旗相不輝く。敵戦尾花のどくは連ね猛威  
 と震つて責まるに。居左原家も勇猛の武士数多あり。色は六里が原に  
 討てり。互に牛角の威勢にて終日挑み戦ひ。左膳ハ多く敗走して  
 士卒もむやく討斃さす。其の此の救箇所の手痺と肩て。木掛邊まで逃  
 伸らう。小勝不衆なる居左原が軍勢透る。追駈ぬ。今ハ防衛の術  
 計及て果敢る。左膳ハ討死し。残る兵南不走。東は逃く。往方あるなり  
 なるまに浦上ハその敗軍と怒る。左膳が家族と追放しぬ。此を二郎ハ  
 三歳まで乳母に抱く。上野の碓氷川を傍りて。稍年月と送る。一  
 ちも物心覚ゆるより。父が戦死の所詣とす。いと母念ふ。母のつ。機力な

つまも父の仇する。居左原の一族を責滅して。孝養不備へののと氣健  
 むも。母の立心。其の目より。乳母が家へ飼ひける馬を牽牛し。調練し  
 深山に至りて。馳廻す。其の時ハ河原に出く。水練を試す。日夜怠る時  
 り。年十九歳の頃。至りて。筋骨既な逞しく。相貌さる。がう。兇惡  
 にて。射御の道も通達し。馬小衆てハ。悪所岩石溪谷山上と馳廻る  
 夏始も木傳ふ様の下。弓ハ養由が迹と逐て。送る。樹頭の。極雲  
 間と翔る。杜鵑と輒く落さる。巧あり。ま。水練ハ。馮夷も。方ら。驪龍  
 領下の珠も。奪ひ。奪ひ。威勢あり。嗟惜。さ。斯す。勇備  
 妙る。壮快る。とも。田夫野人の中小育。た。その勇に。と。若。さら。に  
 一点の書も。字。彼。金革と。祗。て。死。て。厭。ぬ。北方の強者。との。

へま行ひる。此の食うまき堪へて群と語らひ近邊の豪家より  
 て資財と奪入頗る無頼の度のもまき。此度知縣不漏せしむる村  
 らと向らばて虜にるまんとせらば今ハ其地に住まらば。此山上に  
 拳登る。時の危難と避りし。坐して食へ山も空。糧尽て在方なく。  
 在家に押入乱妨して其性命と持するん威勢殊ふおまき。一色ごと  
 まこ繋るまど。あし族ハ属従ハ稍ハ寨と建廣げ。今ハるま。強腕る。  
 威勢あどるりにる。まき。其名を改めて山中に住るとめて妙美の二  
 郎と自ら名乗らる山家にありと。ハハ美味口ハ飽と綿繡の袴と  
 重ねて七珍万宝坐右ハ充滿て翠黛紅顔の清らるる美女と集る  
 且暮ハ酒宴と佳ハ鶯鶯の襖と重はて一生の歡樂とを究めらる。亡

父の究と雪めん。僅ハ志ざらる。此の驍勇と憑とて不義の徒と  
 集會し。る。かろ。頼の兇賊とる。果めるこそお惜ハ。且。此。勇に  
 して字向。あ。ま。賊とる。乱とる。古人の一ハも宜あ。る。か。て  
 小賊。ハ。諸方ハ散。路行人と怯。ま。ハ。豪家。に。入。財と奪  
 して山寨の。扶とる。ま。今ハ。兵乱起て果敢。ま。ま。も  
 る。ま。此夜小賊徒。喘々走。ま。今。准氷川。と。渡。此方へ  
 来る旅人あり。其群。凡。十人。る。行李も。救。又。ハ。早。渠と。追留  
 て奪。ハ。と。二。郎。ハ。遠。近。頃。山寨。不利。あ。て。あ。る  
 へ。獲。物。る。ま。酒。と。飲。ど。甘。ま。心。易。ら。る。に。十。人。餘。り  
 の旅人。に。あ。る。れ。其。行。本。ま。之。ハ。遣。昨。夜。燈。火。の。報。あり。今。朝



喜鵲の噪ありしも是等の吉度よのども急げと矢庭小救十の明  
 松と振照しり兇賊等山と下りて同道徑その外所々に埋伏し健徳と  
 張化と頼めて今や遅しとまる所ふかくとも知らむ旅人等益ハ見よ  
 烈々たる夜の路こそ凌ぐよふと馬も嘶く鈴の音も勇とて此処へ来  
 かる所も思ひもあらざる備より踊り出る山賊等群々たると思ふ春  
 たるや盗人出たりと狼狽するを欲倒し此物音は驚きそ蹄と限すと  
 駈出ると馬と礮と健徳も引倒して行李と奪ふ旅人等今ハ惚  
 くと抜あつる戦へど此方ハ既ハ大勢なり何ふゆつて敵とま  
 する散々に砍とて下り山路のふと消えたる盗人どもハ口々に  
 大吉利市と歡びおひ行李と被ぎ死骸とバ備の谷へ蹴落し

山寨さして帰るが是等と渠等が群ありて跡よりあるを申しあらん  
 ありは速よ注進せうと言合め小賊徒と十人なりてこゝる原ハ幾  
 おたつかくて其夜も更どりたるや三更に近づけば小賊徒等ハ衆  
 多し婦らんとしる時遙み人の行装せり怪しむる言夜中に何考る  
 此と頼め伺ひ居るバ一個の處女いと暗くして定つるねど年交い  
 二十に満む伴る人もあるたさるる巴小賊徒等ハ額と集り斯ら弱  
 艶る女が今三更に裡もあるた夜中に来べきをうこそるをさつれ  
 此処等  
 刃び逢雄子のありて通ふや若あたらばハ吾々が出雲の神に憎  
 佳人ハおろの醜女に愛情の言葉と被らしてなまも流のうせ貝  
 心根と狐狸が見透して泣くさんとするものろ庶莫僥倖よ此  
 処へ張る



此健備這奴引倒してお捕へ虚実と糺して変化する度と引剥衣目よ物  
 又合ん若まご誠の處女にあるるまが山寨へ引かぬた酌とらして酒  
 宴とするまは是もまよるまは身ふあべし。何ハ鬼もあは捕へんと堅唾と吞で  
 待とらあらむ。此処へ浮々木かゝる處女端る。健ふ足と寅縁とを何あ  
 んと振をらふ賊等ハひらりと健の端曳やとむけり。要時も堪えむ。處女ハ  
 其処へ倒るると。此方の影よりむらくと踊る女も取巻て。處女とを扶け  
 起し。うつくしき麗やうある。容ハ言葉にのまをうま。更ハ変化の所為  
 ともこそえねハ賊等ハ處女が裾をほく。砂らち拂ひて。あは處女和女郎ハ何  
 方へ往んとて。此真夜中に人跡の終る野路と独測る。珠のぶらる此と  
 めり。楕梨の熊るどりの猛き獸ハ出會たら。可惜命と喪るん。嗟

怖しやそまよ増て。吾々下まの慈悲ある者ハ出會うること此の幸  
 るま定めてあは郎ありて。彼処へ通ふゆのあは心憎しと戯れて頬の  
 あはり。鬼鬚の栗のつむと生ると推あてんとする其負や除ふあ  
 めも理。女子の此子て人まも。迹終り此処の林原測らん。夏ハ怖し  
 八首とどまらる妙美の山中に居と示る。二郎主ハいとも優美まましく  
 て。救多の美女と俯し侍ら。歌舞音曲と樂をあつと世の風説とま  
 侍る。妾容ハ醜くして。そまよ加ふる。益にあらねど。雅き時より。笛と字  
 ひて。頬を救年丹練し。今ハ家族も死果て。此宇宙に一個の此  
 らり。先頃も国司より。官仕せとて。正里とめて。命と被ふり。うと人間  
 一生ハ夢のどく。消るふ易に蜻蛉の。此と持る。うらるま。大厦高牆ふ

住居して。世に威勢ある。信伸の。傍近く。冊きて。且暮辛苦。世を送ら  
 んや。夫に。まうて。人ふ。を。引利。賊。と。蛇。の。ど。虎。も。等。一。忌。嫌。ま。て。も。  
 上。ふ。怖。ま。主。君。な。く。下。に。養。ふ。民。も。る。く。己。が。ま。み。く。且。暮。て。心。の。如。く。よ  
 歡。樂。ま。る。か。ち。ど。愛。と。た。活。業。る。今。戦。国。の。世。に。あ。る。ま。バ。武。士。の。做。ひ  
 の。取。取。強。盜。ま。ま。で。に。耻。ま。ま。な。も。あ。ら。む。誠。も。勇。々。ま。ま。な。り。と。  
 必。の。の。う。ら。傳。と。の。て。此。山。寨。る。主。の。君。ふ。冊。あ。ん。と。ま。い。ど。も。言。し。我  
 術。も。る。り。に。今。宵。圖。ら。ど。和。主。等。に。出。會。ま。る。と。此。身。の。原。心。思。に  
 ま。ま。時。至。ま。と。覚。え。ま。ま。と。ど。く。和。主。等。導。し。て。山。へ。伴。る。ひ。い。ま。と。ま。ま。相  
 違。の。處。女。が。詞。賊。ま。の。白。と。又。あ。い。せ。て。依。ハ。僻。者。ま。ま。る。ま。ま。處。女。ま。打  
 扮。て。誑。う。ま。と。く。と。ま。ひ。く。所。今。の。口。定。正。く。変。化。執。う。裡。う。但。ハ。山。嶺

山猫の類ひふありや。正体と見せせらんと傳ふまら。よと廣げり。取すけり。  
 處女ハ寛本とらち笑きて。何条哉の處女まあらむと。精く受るまも  
 ず。可笑直まよけりま。あ。ま。ま。吾。倚。ハ。歸。ら。ん。許。し。ま。と。傳。と。ま  
 て。袖。と。拂。ひ。の。ま。ら。ん。と。ま。る。賊。ま。ハ。い。く。祈。う。く。尋。常。の。老。ま。ま。ら。ち  
 驚。ま。ま。て。這。叫。ま。ま。つ。此。と。覆。り。て。絶。り。が。處。女。の。情。ま。あ。る。ま。ま。と。鳥。大。膽  
 る。ま。ま。と。の。ハ。吾。々。に。氣。と。後。ま。ま。て。道。ま。ま。と。ま。ま。計。校。う。何。ハ。鬼。も。あ。れ  
 山寨へ伴ひてんと沈吟しん。夫より處女と中に囲ま草を散り一里平を  
 妙美山へと急ぎたり。依山寨にハ今宵の行李と取崩きた種々の珍  
 器且ままに後羅の清ららる。衣裳の救きえ限まるま。二郎ハわとく  
 歡びて。ま。ま。ま。ま。功。ま。ま。ま。か。る。獲。物。の。あ。り。は。れ。が。今。宵。ハ。處。と。同。じ

是の毒酒を酌んとて暴暴に野狝を割る。鹿と飲てハ美と。猿と殺  
 して刺此とる。其外山川海野の餘味所甘たすを置る。頓て酒宴と  
 催し。美女を集めて舞唄いせ。その貞頗る濃にて。ちや十分の酔と足す。  
 小賊徒等ハ次の間ち。篋子のうに口居て。等一大盞と傾け。山田の  
 蛇が咎音も。あひどりぐる酒瓶とひて。並べ酌尽まに。酒ハ好より免言  
 たり。酌は酌つる汲る。近のどくは酔より。かる所へ麓は残す。小  
 賊徒等が十人たり。おどくとて帰る。くるより二郎ハち帰す。し  
 述より推も本さり。や。今宵ハ獲物の飲ひ。いと暴より酒宴と設たり。  
 労と。らんは汝建も。いづく飲おと言さ。て不図ハ。言ハ。年の頃。い  
 二ハのえと。と顔春華の如く。一個の美女復居たり。供も麗ある

處女子が。何方よりハ。来るも。艶ある。紅粉さ。も粧ハぬ。  
 素顔愛と。夏夏の富士瑤星月下の仙女にあり。や。蓬萊宮裡の神仙  
 う。心も漫よ。い。臆と。目て明。う。口と。信。心も。あら。さ。ハ。宮居  
 の前。は。跪。る。彼。狛。犬。ハ。彷彿。たり。處。女。ハ。此。處。へ。来。て。コ。ト。バ。バ。バ。増。る  
 山寨の。要害。殊。ハ。堅。固。ゆ。て。大。厦。の。構。へ。あ。く。ハ。国。司。と。り。い。と。も。及。び  
 ごと。浪。燭。救。多。連。ね。る。階。下。の。青。葉。に。光。映。し。金。銀。珠。玉。と。接。め。ら。れ。  
 後。殿。ハ。暉。ま。て。眼。も。た。ま。せ。小。見。々。く。救。十。の。美。女。斜。に。並。居。て。宮。内。の。声  
 耳。と。澄。し。糸。竹。の。調。子。呂。律。と。乱。さ。ば。堂。上。佳。妓。と。お。た。る。ハ。酒。の。泉。と。澄。へ  
 流。り。ま。ご。と。も。も。その。昔。唐。山。秦。の。阿。房。官。手。と。姑。蘇。堂。の。樂。も。か。や  
 と。覺。え。眼。冷。く。も。と。感。と。感。と。

第十六回 伴作智勇懐衆人

當下棟梁妙美の二郎ハその放心をまきあつて。小賊徒と近く招きよ處女が  
 来りし縁故をいひ何事の考ありやと。稍と問ハ小賊等。委細ハ今宵の  
 始終を語る。二郎ハ笑てゆへもあつた。處女にも似て大膽も此山寨と  
 美次ハ。あるごとを伴作のまき連々野々より擇まゆて。救多の美人と左右に  
 おけど。美次ハ競てこつた。八極の本の枯木に等二月ハ甲乾き泥龜と  
 似ても似ほつぬ容貌あり。頗々此方へ誘へど。たゞ十二分の笑と含めて。  
 魂さらふ化は添む。漫ハ踊りあがれも。小賊徒ハ處女として己が耽  
 樂入せんものと。あつた。あつた。あつた。更ハ本意ある。足ども棟梁  
 の命背きかて。流るる處女がと把此方へ来ると奥の間なる。主

領が備へ伴ひて。いざ棟梁ハ随意に。大骨折て鷹とやら。巷方ハ  
 と咬きつ。跡後巡して往りのうら。名遺惜くて。遙此方ハ。その為体と伺  
 と居る。妙美の二郎ハ處女がと把。今小賊等ハ詞とさけハ此山寨と  
 羨みて吾ハ冊き給事せん。と豫て心ハ願ひ。今宵圖らる。棟梁に  
 知れ。吾備へ来て嬉し。今より吾に冊きて。他多き。勢ハ吾も亦  
 寵愛して召おく。年ハ我輩を。生えハ何方を。傷も。鄙み。掃る  
 處女。あつた。彼処ハ並居らる。ハ。側女中。悉く。美面容。了。去  
 と擇めど。其方の下。艶る。に。蔭。る。者。一。個。も。あ。ら。む。今。宵。の。事。  
 黄道吉日。も。何。等。の。陽。報。あり。て。いと。不。憶。行。李。と。似。せ。並。び  
 る。は。美。人。と。似。る。處。女。酒。と。飲。ね。殺。と。食。強。と。勸。待。ぶ。り。或。ハ。襟。へ



てを彼ら腰と抱きさらさるる戯れられど彼處女ハ物のなる回上屋の  
 更ふ一やも詞と出さむ。二郎ハ是と訝りてや。處女曩よりして少  
 も詞と出さぬハ心は怖れぬ其のありて亦ハ吾威の怖くして驚か  
 らるや。處女名とバ何と喚び做まると問ど只管京原の三回答せられ  
 あり。什麼不測啞ふあるや去ゆても麓ふおのくハ小賊徒ハ物語あ  
 せとゆふに如何ある訳と頻りに問へど。さらく回答せぬるや。二郎  
 ハ心に此處女形容こそ大人品ととどまど。年往孫バ満坐の中と心耻  
 くらさ小物とまへ言豫めると覚あるふ。いづく。国房へ伴ひて吾より外に  
 人あらむ。語り慰さむ其もあらん。たや酒さも十二分酔らる物と  
 處女がよと把左右侍。側女等に提燈掖して奥深き国房の

裡へ伴へば處女ハさくら小毬と否まれば伴ひてぞ入る跡も残る  
 小賊徒或ハ側女等うちよめて酒食の残りとまじり食ひおのく  
 側女等ハうち集會ていと物好る女もあつる吾々此処ハ  
 虜ひて歸る往べきなるをわづらひて側女と鳴きあひ良人や  
 親と棄渠等ハ肌化様さうハ若活生て息のうちには恋しき人逢  
 夏ゆめと惜るぬ日を送るども夫も引くえ怖しき山山寨と羨て  
 といハ嗚呼あはげや。さうと棟梁ら弱く艶る容と心は愛今賢ハ  
 老ふ吾々と見かへりどもはま渠と連て目房にいじりハ彼小返  
 て吾々と諫まふ却て此化の傍倅嗟さるふても彼處女らつる老の  
 果ハ初ら後と望て來るる心意とまらむまて討しきハ此の物

言ぬも怪しくもや。吾々かゝる患苦とらけ。堪ぐはるハ神祈  
 佛は折言ひて故郷へ帰らん夏と明暮に愿ふ心の信は協ハ口通  
 菩薩ハ弁財天うかゝる處女に打扮て。二郎主の心と蕩つ。まて  
 吾々と諫ま存て。帰るゑん計の。夫は又圖りあはるるねハ今  
 宵ハ殊よ二十六夜月の出さるも三尊の佛は拜すれあへる。いそ  
 化と淨めて念ふゑんと。奉て語を居ると。二郎が目房の方と覺  
 しく。嗟堪ぐ。許させぬ免くゑんと叫ぶ声。手に把るはあはる  
 う。側女等耳と引きて。是ハ正しく主領の声なり。ゆるる珠事ハ  
 出木ほらん。是もあはるもあはる當りの。處女ハ定に神明の化現  
 たるに疑ひ。化と頻め息と慄る。寤るさるに歡待て。あつづ

恐る半ハ致した。と自ら動静と安居るに。二郎の声にしてや。少年  
全く野生が僻まなり。并甘やくと五膳六膳と絞るなりに。慥然  
たり。遙山方に酔倒し。雷のてらふ鼻息と音う。熟睡する小賊  
等。不圖此声とぞうけて。あや什麼怪し何ぞあやと傍に卧る群  
の族と揺動し抱き起して。絡く提燈とあり照し。刀の舞口甘げてま  
あがると酒氣醒れ。踏々として進まぬ足踏固め漸々。二郎が  
国房の邊へある襖と風と門あく。骨不處女と口又より。八十七  
八ある少年にて。緑の黒髪より乱し。眼と怒ら。牙と嚙。二郎が唇  
あらくと把。床よかけ。太刀ぬき持脊のうへ不跨がりて。白眼はめ  
はく居たり。小賊徒ハととて。嗟とをりに仰天。必と腰と

うち抜して。只管怖と慥く。の支えんとする者も。かくて二郎  
ハ苦き息と。あつと吻き。彼等と云なり。は達何の怨とあれ。  
處女よりとて。吾と欺き。かく怖し。者と伴ひ。殺さんとする計。絞  
嗟情る。力の共う。と。声震は。て。怨む。日頃。勇氣の逞は。く。  
在。さ。あ。も。似。む。か。を。う。の。少年。は。祖。ある。は。勤。き。あ。い。ハ。何。真。ぞ。頻  
刎。返。し。あ。や。と。言。は。く。渠。等。も。ま。あ。り。夫。庭。に。打。く。あ。る。あ。ぞ。少年  
透。さ。さ。と。斤。と。伸。て。立。々。發。方。と。破。拂。ふ。太。刀。風。お。あ。く。と。近  
は。く。度。さ。又。懐。い。ね。は。く。足。ま。く。寄。は。ら。む。二。郎。ハ。渾。此。の。力。と。震  
て。刎。返。さ。ん。と。問。ふ。ま。と。殺。千。介。あ。る。巖。石。と。背。に。拵。く。着。る。と。く。  
動。く。度。さ。又。懐。い。ね。は。く。只。眼。と。睜。ま。口。と。の。ま。曲。む。ま。く。と。詮。方。あ。り。

かて少年勇る。畳み大刀と突たる。吾は咎ふ怨も多し。仇も  
ある事と曾てま。人ハ五常の道と守りて。夜も非道の挙動は  
くその職と務むと。人倫とこそゆえ。既ハ国司の命に背き  
且近きと猖狂し。人の患ふる所とて。此の樂と做さゆのハ獸不  
も。我方より。既ハ虎狼の猛ま。人て怖る。野あは。漫に  
人家へ迫る。適里へ。あま。人必しも。是と逐ふ。追ふ。渠  
等ハ逃去の。ま。敢て仇と。女等。左。あ。逐ふ。の  
も。忽地。怨と會んで。是と傷ふ。兇惡る。夏言語。絶。今  
速。頭と裁割。世の一害と除え。易。夏。吾ハ少  
の野。あ。普く命と。佐。に。吾ハ。野。は。従。や。回。答。に。りて

注方ありと。詰。問。て。妙美の二郎が。下僕。微弱。あり。る。ろ。  
かく。暇。多。ある。賊。徒。と。従。へ。山。山。中。の。主。領。と。る。夏。更。ふ。仁。美。は。據。  
の。る。ま。ど。も。是。も。脅。力。と。りて。懐。くる。に。三。百。余。人。の。小。賊。等。吾。半  
臂。にも。足。り。の。る。君。ゆる。れ。徳。角。の。り。も。優。き。此。と。持。て。か。  
剛。強。ふ。在。ら。ん。心。の。裡。あ。る。む。と。い。ど。り。君。と。りて。主。領。と。仰。ぎ。  
吾。々。幕。下。に。属。さ。る。夏。る。聊。香。ミ。ヤ。ベ。ま。や。生。血。と。さ。りて。誓。と。ま。  
堅。固。み。従。ひ。や。さ。ん。と。笑。より。少。年。阿。々。と。冷。と。笑。ひ。の。あ。る。の。野。傷。  
る。ら。ど。く。頼。許。さん。吾。山。寨。ふ。止。ま。りて。強。盜。引。利。の。主。領。と。なり。  
不。美。の。富。貴。と。真。人。と。心。ふ。己。心。の。る。ろ。汝。等。吾。ハ。附。属。せ。ば。  
ま。と。施。さ。ん。計。策。あり。と。二。郎。と。許。せ。起。あ。り。傍。も。美。面。と。た



妙義山小  
伴作  
松井田の  
烟と  
新



處女と名ひ曩の不礼ハ許しあるは是より君に従ひく。此と粉を  
 碎き骨と割ても命に悖りけり。額着と救回小賊徒らも一同  
 小此少年と拜する妙美の二郎ハ頭と擡げ君ゆるるは處女打  
 拵かゝ徘徊する。同きて寛ふとうち笑るる吾ハ杉倉伴作とて  
 元如此くの此のうなり。夫より這般とるると此の顛末と説あるを  
 ぬく。汝等吾は從ひ忠勤と励むとなら。まこと汝等と誡め置べき  
 倅ハ救箇條ありとしど強止めあるをさやハす。第一ハ在家推  
 り。不美の黄金と貪るぶらむ。弟二ハ汝等と貪り。是ハ救十の  
 美女と集む。渠等定て親同胞まら良人と持たもあらず。汝がよし  
 と歡ぶ美女ハ人まらとと歡ふへ。そと奪ひく。傍へおれ且暮耽

樂と律とさるハ群犬食をまわるとは弱こと嚙て己の食と  
 貪る類ハ等一第三ゆ々強さを撃弱こと扶けて美は背らむ。  
 吾等とこそハ人間の豪傑といふは。その外示とべきは。其れは  
 仲る守りぬ。まら箇在の入教と養ふ。輒きあるふあらざれば。  
 吾ははらぐ。名ひ量るに。国司とよめ知縣等ハ。貪亂の族  
 の。みて民と廉げ清士と傷ひ自ら栄耀榮花は落す。罪ある者  
 も金銀りて。賄賂と罪咎と者。無罪の者も心ハ合は。忽地  
 破て猛威と示。乱妨狼藉は頼ある言言語と絶する。僻  
 者のみかり。あらず渠等ハ大に富む。その不美等て等へぐ。一  
 悉く渠等が貯る。不美の黄金と奪ひ把て良民小分ちとへ

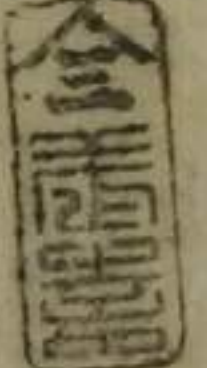
まこと山寨の佐とるさへも誠小大丈夫天を代つて道を行ふ  
理ありも似らるべし吾僥倖は血野へ来て頼る教百の人教とひき  
心は深き宿願の果とて速くも速くも暫く此処に住すりて信上  
二国は威と震ふ不美の族と戒しむとて渠等再拜し示  
あり一伍一竹膽小名とて領掌もいふ此処に留りて此山寨  
の人救とめて君は拜得るまで契くと小賊徒等小演説され  
此処彼処よりいひてある小賊凡そ三百余人此処るる白洲は低頭  
して伴作と敬ひたり伴作是をいふ心の中は美しき法令  
と出して乱妨と戒め是より新に邊と設て小賊等と労ひつて  
彼小雪阿千賀の千賀お無頼るれども要時がらと養ひ稟し

恵もあはれ老女も此処へもとて喚よりあつて伴と圖らんと  
ふくまは妙美の二弟と近く招きて此處を如此とると低語り二  
郎は忽地領掌しあつて某人救と卒き松枝は立超て俱く床  
らけん勇とて伴作要時とおし止め汝等大勢赴たるは  
渠等頼る恐怖して逃呻吟古もあらんさすは己が志と喪ふ  
夜は文明あが吾一個彼処へゆき伴ひあつてさのみ急そと渠を  
制する詞もいふと終らぬ所へ門成る小賊馳あり今松枝の方に  
あつて煙の多く立込ば夫倉も昇りて遠見するに正しく是ハ  
軍勢の彼処と放火するはとてこの山寨と追討すべし官軍  
あつてはと詞用しく注進すは妙美の二弟八眉と頼り吾

此山寨近国へ猛威を示し、むくののろ。国司も甚と恐怖する。追討の官軍とらん。此程巷の風説。去年鎌倉の成氏朝臣而上杉と合戦あり。終に敗走し、あひて下野まで引退き、古河小居城と構へらる。鬱憤さらけに止時なく。まこと鎌倉と襲いんとて軍勢催促せらる。及びいづこは定ふ古河へ味方の軍勢等が陣押みてありぬべし。まよおは彼処と放火する。新棟梁る杉倉主が知音の人々、いづよありん。斯安岡と居る。あらば頼之、頼之、頼之。準備とるせと促ぐせ。応と回答て小賊徒群を多し馳めり。頼之軍馬と牽来り。準備もあらう整ひたり。伴作坐て心たらば。止し、彼処と放火せ。彼人々等覚束る。まよとて馬は踏踏し。

二郎は赤色士卒等も、俱に続けと鞭あて。山と難所の嫌ひる。暮地小栗着つ。此処に至ると、軍兵をい。往方ハ遠く隔と。建連あつる民屋旅店烈火煌々として黒煙天に沖し。猛焰騰々とて白日の下。二十余町が其あつひ。虫の這ふ定ふ。みえぬ。かき遠しき騒動あつた。老若その度と喪ひて右往左往に散乱し。老るといふ幼きと扶て逃ハ呻吟と。或ハ手足を挫く。或ハ半死焼爛と泣叫ぶ声天地に充滿。阿鼻焦熱の苦しみも斯やと名ひて良き方なり。伴作ことごとく、胸に胸に。真まて。彼人々ハいづよありん。猛火のこめに果敢る。心焼。いん去ながら。小雪といひ千賀板も心怜悧のる。彼人々。

のまゝもあまあま命いのちと喪なくるまのまままあらま何なに方かたへま呻うめ吟いん出いるでややとと並なら  
 びび心こころをを二に郎らうととたためめ小こ賊ぞく等らをを近ちかくま招まねきまそそのの人ひと体てい  
 遠とほ般ばんのの者ものありあやや尋たづねね探たづねねとと命いのちとと傳つとへへ四よ方かた八は面めん馳ちめめぐぐりりくく  
 普あまくく探たづねね素ゆとむむれれどど摸も様ようのの似にらら人ひとささええああ。此こゝ松まつ枝えだのの人ひと民たみ  
 等らもも半はんハハ荒あれれ半はんハハ逃にげげてて往むか方かた知しるるとと笑わらひひののろろ伴ばん作さくりりくく心こころ  
 ろろねねどど今いまハハ何なにとと詮せん方かたななくく彼か方かたハハ碓すい氷ひのの川がはとと限かぎるる此こゝ方かたハハ  
 峠とがのの坂さか口くちでで人ひととと走はららくく密ひそかかにに見みええるる且かつくく智ちををねねババ人ひと救すくをを回まわ  
 めめ妙まう美み山さんへへどど帰かへりりるる



十杉傳卷之八終

